

インド核問題の現状

— 首都デリーにおける現地調査報告 —

中西宏晃*

筆者は、米印原子力協力協定締結後のインドの核問題の現状を幅広く探るため、平和紛争研究所主催ワークショップへの参加、そして、首都デリーにおける聞き取り調査を以下の日程で実施した。なお、第二期調査は、筆者のインド国際法学会 (Indian Society of International Law) における報告 (4月2日～3日) を兼ねて実施した (表1)。

平和紛争研究所主催ワークショップ

2月23日から27日の5日間、ハリヤナ州スラジクンドのクラリッジホテルにて行われた、平和紛争研究所 (IPCS : Institute of Peace and Conflict Studies) 主催の「核軍縮・不拡散に関する若手研究者合宿ワークショップ (Young Scholars Residential Workshop on Nuclear Disarmament and Nonproliferation)」に参加する機会を得た。この平和紛争研究所では、半年に一度、イン

ド国内で若手研究者育成を目的としたワークショップを開催している。合宿形式のものは今回が初の試みということもあり、筆者を含め、海外からの参加者もみられた。このワークショップは、インドで核軍縮・核不拡散問題をリードする、研究者・学者・政策関係者などが講義を行ない、当該問題に対する理解の促進と、核軍縮に向かうために、インドや国際社会はどのように取り組むべきか、といったブレイン・ストーミングを行なうという、大がかりな内容である (写真1)。

紙幅の関係で、筆者がとりわけ重要と感じたところを以下で簡単に紹介したい。まず第

表1

第一期	2011年2月22日～3月8日 (計15日間)
第二期	2011年3月31日～4月8日 (計9日間)



写真1 ワークショップ参加者
(2011年2月27日撮影)

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

一に、米印原子力協力協定についてインド政策関係者がどのように考えているのかが聞ける貴重な機会を得たことである。ヴェーンカテーシュ＝ヴェールマー外務省軍縮・国際問題担当局長（Venkatesh Verma, Joint-Secretary, Disarmament and International Affairs Division, Ministry of External Affairs）は、インドが米印原子力協力協定により、国外から供給されたウランを軍事利用のために転用できると考えるのは誤っていると指摘した。また、インドの核兵器計画はウランを基礎としたものではなく、そして増殖炉も軍事利用ではないこと、さらに国際原子力機関（IAEA）の査察の外に置かれたもの全てが軍事利用とはいえないことを述べた。最後に、協定はあくまでも平和利用に限定したものであることを強調した。また、講義後、氏に個人的なインタビューを行ない、日本がインドとの原子力協力に際して、米国との協定では曖昧にされていた部分である、核実験すれば即協力停止という文言を挿入したいと交渉していることについて質問を行なった。氏から、包括的核実験禁止条約（CTBT）と、そして、インドが核実験モラトリアムを継続することを前提として、2008年9月6日に決定された、原子力供給国グループ（NSG）におけるインドの例外化措置を尊重する立場から、インドは核実験をしないという立場であるとの回答を得た。その際、氏は、インドが核実験をしないのは、法的義務ではなく、インドの自発的なコミットメントであることを強調したことが印象的であった。

第二に、今回のワークショップにおける

初めての試みとして、各グループ（インド政府、パキスタン政府、国際社会（国連など）、テロリスト集団の4つのグループ）に分かれたうえで、予め設定された架空の事件に対する模擬演習のプログラムがあった。今回のあらすじは、パキスタンの核兵器がカシミール独立を目的としたテロリスト集団に盗まれ、インド政府が脅しをかけられるとともに、印パ間の緊張が高まりつつあるという架空の事態である。この模擬演習を通じて、インドで喫緊の課題として認識されているのは、テロリスト集団（政府支援か否かは不明）が、いわゆる管理不足の核兵器を略奪し、それをインド政府に対して脅しに利用して、自らの目的を達成しようと企てるのではないかという、新たな脅威であることが認識できた。

第三に、最後のセッションとして、核軍縮は実現可能（feasible）か、そして望ましいか（desirable）という共通題に対して、各グループが個々に検討した内容を発表するというプログラムがあった。非常に残念なのは、核軍縮は望ましいが、実現可能性は無いのではないか（各グループの時間軸や対象軸の設定はバラバラ）という意見がほぼ大勢を占めたことである。ワークショップにおける一連の活動を通じて、核軍縮・不拡散、ならびにインドを取り巻く安全保障環境の困難さを真摯に学んだ結果かもしれない。ただし、核軍縮の希求を共有できたことは唯一の希望であった。

最後に、紹介しきれなかった講義内容については、ワークショップ報告書（<http://>

www.ipcs.org/pdf_file/issue/YSW2011-Report.pdf) (2011年8月23日アクセス) を参照されたい。

核軍縮平和連合 (CNDP) の訪問

米印原子力協力協定の締結により、米国ならびに国際社会との原子力協力が現実味を帯びてきたインドにおいて、どのような国内世論形成が行なわれてきているのか（とりわけ、原子力損害賠償法制定後の国内世論の動向）を検討するため、デリーで大規模な核軍縮（平和）運動を推進する団体（NGO）である、核軍縮平和連合（CNDP：Coalition for Nuclear Disarmament and Peace）の事務所を3月2日に訪問した。

そこで、当該団体のアドバイザーを務める、ア Nil・チャウダリー（Anil Chaudhary）氏と面談するという機会が得られた。第一に、国民会議派とインド人民党の政策の違いについて伺ったところ、国民会議派は核抑止を強調しないが、他方でインド人民党は反イスラームとしてパキスタンに対する核抑止を重視しているという違いがあるが、両党とも核兵器の維持や、防衛費増額の継続という点では違いはないとの回答を得た。

第二点目に、米印原子力協力協定締結後の運動の状況について伺ったところ、氏は、原子力協力が現実化した現在では、反核兵器では同じ立場を共有できているが、原子力を巡っては意見に差が生じてきたことを指摘した。とりわけ、2006年頃から南インドにおいて、反核運動国家連合（NAAM：National Alliance of Anti-nuclear

Movements）という大規模な反原発運動が別に生じてきたことを伺った。最後に、ジャイタプール原子力計画問題について啓発活動を実施しているが、未だインドで大きなうねりになりきれていない現状も伺った。

今回の訪問は3月11日の東日本大震災に付随して起こった福島原発事故の直前であったため、その後のNGO活動や世論の動向については改めて調査したい。

カラン＝シン博士との面談

米印原子力合意を推進した国民会議派ほどのような核政策をもっているのかを探るため、3月5日に、国民会議派外交委員会委員長（Chairman, Foreign Affairs Department）のカラン＝シン博士（Dr. Karan Singh）と面談するという貴重な機会を得た。

第一に、1998年に核実験を行ない、核兵器国宣言を行なったインド人民党の核政策と国民会議派の核政策の違いがあるのかという点について単刀直入に伺った。氏は、確かにインド人民党は核兵器により積極的であるが、両党がインドは「核兵器国（nuclear weapon power）」であると認めたこともあり、核政策についてさほど違いはないとの回答を得た。その際、氏は、国民会議は、原子力エネルギーを重視するが、インドが一方的かつ単独で「核兵器の放棄（disarm）」をするのは困難であることを強調した。また、氏は、「核化（nuclearization）」を開始し、その後、原子力協力について米国と交渉を開始したにもかかわらず、米印原子力協力協定には反対するという、インド人民党の行動は理解に苦

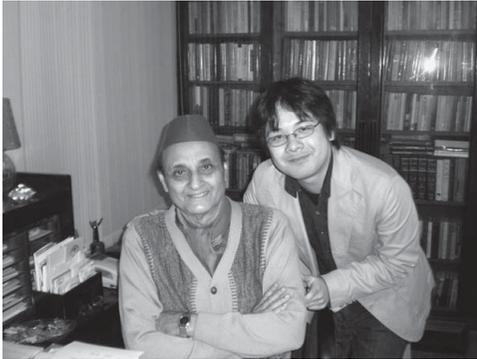


写真2 カラン＝シン博士と筆者
(2011年3月5日撮影)



写真3 ジャスジット＝シン博士と筆者
(2011年4月7日撮影)

しむと述べた(写真2)。

第二に、核不拡散条約(NPT)に対するインドの立場について質問した。氏は、パキスタンと大量破壊兵器テロリズムが結びつくという不拡散の問題を懸念しているが、NPT自体は許容しないことを述べた。また、氏は、NPTを、平等かつ普遍的な新条約に「置き換える(replace)」ことを謳った、ラジーヴ・ガンディー首相(当時)が1988年に国連軍縮会議で公表した核兵器廃絶計画に言及し、インドはそれを真摯に望むが、インド単独では、国連安保理の常任理事国5大国(P5)の存在があるため、それを達成することは困難であるとの認識を示した。

氏の公務の忙しさゆえに、今回の面談時間はたったの10分程度であったが、国民会議派の核政策の一端を垣間見ることができた。

ジャスジット＝シン博士との面談

インドの核政策、とりわけ核兵器を保有するに至ったインドの実態を探るため、空軍准将(Air Commodore)であり、前イン

ド防衛研究所所長(Former Director, IDSA: Institute for Defence Studies and Analyses)である、ジャスジット＝シン博士(Dr. Jasjit Singh)と、4月7日に面談する機会を得た。氏は、1999年に国家安全保障諮問委員会から公表された、核ドクトリン草案の起草者(本人談)である(写真3)。

第一に、氏は、インドの核ドクトリンについて、基本的な立場は、核抑止を目的とするが、「非核武装(non-weaponized)」であり、かつ「インドから核兵器による攻撃や威嚇は行なわない(no fight)」ことであると述べ、とりわけ、平時に核弾頭とミサイルを分離しておくという、核兵器の「非配備(non-deployment)」が十分に理解されていないとの認識を示した。もっとも、危機の際には、6時間程度で核弾頭ミサイルを配備可能であると述べた。そして、インドの核抑止は、核兵器能力の「最大限(maximum)」ではなく、「最小限(minimum)」で実施するものであることを強調し、60から70個程度の核弾頭のストック(たとえば、24個を対パキスタ

ン、36個を対中国)で十分であることを強調した。さらに、メガトン級の核兵器は必要なく、100キロトン程度で十分であり、先の核実験(1998年)でそれが十分確立できたため、更なる核実験は必要ないとの認識を示した。

第二に、なぜインドがこのような核兵器能力を保有しなければならないのかについて、氏は、パキスタンが核兵器の「先制使用(first use)」を放棄しないことを挙げた。

第三に、対中国に対しては、5000キロメートル級の弾道ミサイル開発には至っていないが、中国のダムへの攻撃による深刻な洪水によって抑止が可能であるとの見解を示した。

最後に、氏は、核兵器国による核の傘を放棄すること(日本を含む)が核軍縮の推進にとって必要であること、また、氏が小渕首相(当時)と面談した際に、インドを「ヒロシマ・ナガサキ」には絶対にしないことを誓ったと強調したことが印象に残った。

おわりに

紙幅の関係で、今回の現地調査の全てを網羅できなかったが、米印原子力協力協定締結後のインド核問題の現状が少しでも伝われば幸いである。今後も、インドの核問題についての研究を一層深めて参りたい。

ベトナム人の家への招待

山 川 篤 子*

2010年11月からおよそ4ヵ月半、語学研修も兼ねて私はベトナムのハノイに滞在した。大学時代にベトナム語学科生だった私は、大学院に入るまでにすでに3回にわたってベトナムに渡航していた。ただ、これまでの滞在は観光や資料集めが目的で、2週間以内の短期の滞在だったため、ベトナム人の生活を身近に感じることはなかった。したがって、今回のベトナムでの長期間滞在は、異

文化を体験できる、期待の膨らむものだった。ベトナムは長い間中国の支配下にあったため、中国文化の影響が強く、日本と似た文化が他の東南アジア諸国より多いようにみえる。しかし逆に似ているからこそ、日本文化と異なる点が目につきやすい。現地ですばしば他の日本人留学生と、日本と似ている点・違う点について話をするがあった。

フィールドワーク便りを執筆するにあつ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

て、ベトナムでの生活を思い返してみると、ひとつの疑問に思い当たった。それは「ベトナム人はなぜ頻繁に人を家に招くのか」ということである。人を家に招くことは珍しいことではないが、ベトナム人のそれは日本と比べ頻度が高いように思えた。他の国々の事情を知らないで、ベトナム特有の文化とまではいえないかもしれないが、私の日本での経験からすると多いように思う。私の実家も人の出入りの多い方だが、それと比較してもやはり多い。日本では外国人と親しくなったからといって、すぐに家に招くという文化はあまりないように感じる。むしろ観光名所を案内したり、一緒に繁華街へ遊びに行ったりすることの方が主流である。日本では、たとえば家が世界遺産などの名所の内部・周辺にある、人を呼びたくなるほど立派または新しい家である、何かの行事や祭りがあるといったことが人を招く誘因になる場合がある。しかしベトナムの場合は、これらは人を呼ぶ第一の要因とはならない。

「ベトナム人が人を招くのは親しみの証拠である」と、ベトナム人の友人が教えてくれたことがあった。ベトナムでは、親しくなった人と家で共食するということが風習となっているのだろう。ただ、私が外国人で物珍しいということもあるためか、会ってからそれほどたたない人でも夕食に招いてくれることがあった。調査のため国立公園周辺の家やレンジャーの駐留所を訪問した際に、ただ立ち話をしていただけだったにもかかわらず招いてくれることがあった。また自身の研究のため、失礼な質問をすることもあったが、気に

するどころか、むしろ何度も家に遊びに来るように言ってくれた。また何百キロも離れた実家に呼ばれることも少なくなかった。私には、親しみの他に、ベトナム人には「招きがり屋」の傾向があるように思えた。

もうひとつ家の存在を意識することがあった。それは忘年会などの宴にも家を使うことである。前述の友人は、宴はレストランやベトナムの居酒屋のような場所で開くこともあり、特別家が多いわけではないと言っていた。しかし家に皆が集まるのは、親しい間柄であるからだとも言っていた。私は研究のためベトナムの森林研究所にいたが、その間に、月1回程度、誰かの家に集まることがあったものの、どこかのレストランで夕食をともにするというはなかった。確かに研究所が主催する新年会などの公式的なパーティーは家ではなく、研究所で行なわれていた。しかし、それ以外の宴は全て家で開かれていた。また家での飲み会には、たいてい20~30人くらいの人が集まり、それも顔見知りの人が多い。また出席者が家族を連れてくることもあった。これほどの人数が家に集まることは日本では珍しいのではないだろうか。このように、人を家に招くことはベトナムでは珍しいことではないようにみえる。私には、ベトナム人にとって人を家に招き、共食することが何か特別な意味をもっているように思えた。

家によく招くのであれば、その理由は家に存在するように思える。しかし家に何か特別なものがあるのか、というと特に何もない。珍しい、美しい環境も、みせるべき家宝もあ



写真1 夕食の様子

るわけではない。招かれた者は、夕食の準備ができるまで家の者や他の来訪者と会話を楽しんだり、家の周辺を散歩したりする。私は夕食作りの手伝いをしたり、散歩をしたりすることが多かったが、招かれた方にはゆっくりとした時間が流れる。夕食ができると皆で円になって食べる。家で開かれるパーティーも個人的に家に呼ばれた時と基本的には同じである。仕事が終わってからそれぞれがみんな家に向く。準備ができるまでは男の人は輪になって話をしていたり、先に小宴会を始めていたりする。女の人は食事の準備をしながら世間話をしている。準備ができてからは、主催者が挨拶をし、互いに乾杯をし、食事をとる。食事が進むと酒をもってまわって色々な人と話をしたり、再び乾杯をしたりする。このような宴は、世間話をしながらも、仕事のことについて語ったり、社会的な問題を話したり、情報交換や交流の場となっている。



写真2 夕食の準備に忙しい様子

家に招くのは家や周りの環境をみせるためではなく、家に集まることで互いに情報を共有し、関係を強化するためのように思われた。

次に家で出される料理について試してみる。もてなされる料理は毎回異なり、招待用の決まった形式があるわけではない。ただ、何度か鍋料理が出されることがあった。鍋料理はもてなしの際に出される定番料理のひとつだ。その理由は沢山の種類の食べ物を皆で共食することができるからである。ベトナムの鍋料理は日本と同じように野菜をまず入れ、その後キノコ類や魚介類、肉類を入れ、最後に麺類でしめる。しめにご飯を用いることはない。また使う野菜の種類が多いことや魚介類を多く用いることなど若干の異なる点はあるが、皆でワイワイと鍋をつつく雰囲気は日本と同じである。鍋ができると最初に、招いてくれた人あるいは家の主人から接待客への挨拶があり、みんなで乾杯をしてから食べる。さらにベトナムでは、食べる前に、各人が、家の人、周りの友人に「戴きます」と一言述べてから食べ始める。基本的に自分で欲しいものを取って食べるのだが、ベトナムでは、参加者があまり食べていないようにみえたり、偏ったものしか食べていなかったり

いるのであろう。つまり、この招くことこそがベトナム人の重要な社交方法になってい

る。家は、ベトナム人にとって社交性を促す大事な場所なのである。

ドナを葬る

溝内克之*

「ドナが、別の世界に行ったよ」

午前4時。その電話を受けたのは、調査村から近い街の安ホテル。電話をかけてきたのは、村でお世話になっている家族の「お父さん」アロボ。ドナの兄弟だ。その電話が、「ドナが死んだ」という連絡であることを理解することは、容易ではなかった。ほんの数週間前に、ドナの婚約者の実家へアロボや長老たちと一緒に結婚の許しを乞いに行ったばかりだったからだ。その時には、ドナが特に大きな病気を患っているようには見えなかった。小学校で教師をしているドナは、「お前の仕事はどうだい？」と私の調査の進捗をいつも気かけ、ご自慢のホンダのバイクでいろいろな場所に連れて行ってくれた。私を家族の一員のように接してくれた「お父さん」のひとりだった。

数十分後に病院にたどり着くと、アロボが「冗談みたいだな」と言って迎えてくれた。付き添いのアロボを除くと、私が最初に駆けつけた「家族」だった。アロボによると、数

日前、体調を崩したドナは村の近くの病院に運び込まれ治療を受けたが、容態が悪化。昨晚、街の大きな病院に移されたものの治療の甲斐なく、あっという間に亡くなったという。街の病院へと移る時には、婚約者と正式な結婚に先だって生まれた赤ちゃんに、ドナ本人が「心配するな。大丈夫」と話したという。誰も予想しなかった死だった。私も「まさか今回の調査がドナの死によって締めくくられるとは…」と困惑するしかなかった。

村住まいの調査。それは、ただ決まった質問をするだけではなく、自らの体を使って村の人々の生活を学ぶ過程でもある。酒場で地酒を飲み、村の生活にとって酒とはなにかを学ぶ。バケツで近隣の世帯に水をもらいに行き、近所づきあいを知る。しかし、実際に自らが体験できないことも多い。当然のことだが「死」もそのうちのひとつだ。「死」は、調査者だけではなく、すべての人に体験し誰かに伝えることを許さない。だからこそ、人々は「死」とどのように向き合うかに

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

苦心し、さまざまな葬り方を編み出してきたのかもしれない。「どのように『死』と向き合っているのだろうか？」ここ数年、そんなことを考えながらキリマンジャロ山間部の村々を生活の場もしくは故郷とするチャガ人 *Chagga* と付き合ってきた。

チャガ人は、19 世紀末に植民地化とともに持ち込まれた換金作物のコーヒーを、早くも 20 世紀初頭に栽培し始めた人々として知られている。また彼らは、都市で活躍する人々としてもよく知られている。コーヒー販売から得られた現金を、学校教育や商業活動に積極的に投資したチャガ人は、早くから都市部に進出を果たしてきた。その結果、政府役人や教師などのフォーマルな職に就く者や商売で成功する者を多く輩出してきた。近年、村に現金をもたらしたコーヒー生産は低迷しているが、積極的な都市への移動は継続している。調査村では、小・中学生が卒業する 12 月ごろになると他地域での進学や就職のために、村に残る家族に見送られながらバスに乗り込む子どもたちの姿を頻繁に見ることができる。都市への移動には、キリマン



写真 1 キリマンジャロ山

ジャロ山間部における土地の不足という背景もある。調査村の各世帯の耕地の平均面積は約 0.24 ヘクタールでしかなく「この庭のような畑だけでは生きていけない」と多くの村人が語る。

都市への移動を人生のサイクルに織り込んできたチャガ人は、家族・兄弟姉妹が各地に散らばって暮らしていることが当たり前だ。したがって、日常的に電話などでのやり取りはあるものの、一堂に会する機会はどうしても稀になる。このような状況では、誰かの死が家族・親族の関係を再確認する機会となってしまう。

調査地で初めて参列した葬儀は、イギリス留学中に客死した若者の葬式だった。村を離れ、タンザニア国内外の都市で働く親族がお金を出し合い、イギリスから遺体を村まで持ち帰った。遺体の収容と搬送に骨を折ったのはドイツで働く故人の父方叔父だった。タンザニアの首座都市ダルエスサラームに暮らす父親や近親者たちは、親族・姻族、同郷者などからの寄付を募り遺体の受け入れの準備をしたという。村に暮らす親族たちはキリスト教式のミサやそれと並行して行なわれる儀礼の準備、葬式に参列するために村に帰省する人々の受け入れの準備などをしていた。葬式には多くの家族、親族、姻族、友人知人が駆けつけ、村・都市へと広がる家族・親族の関係が目に見えた出来事だった。

その後も多くの葬式に顔を出した。葬式のために多くの人が帰省し、日ごろ静かな村が活気あふれる村のようにみえる。葬式は、平時バラバラに暮らす家族・親族・友人たちの

交流の場となり、厳粛な雰囲気を残しながらも、どこか再会を楽しむ雰囲気に包まれる。

アフリカの多くの地域で共通していることだが、調査村でも死後、母村に埋葬されることが好ましいとされている。高学歴のエリートであろうが、零細露天商であろうが、多くのチャガ人が「村で埋葬されなければならない」と述べる。しかし、村で埋葬されるにはさまざまな苦勞が伴う。まず母村の土地を確保する必要がある。都市に埋没し、母村の家族や親族との関係を切っていれば、死後の埋葬地となる土地の相続を父親に拒否されるかもしれない。そのような事態を避けるためには、村に足跡を残しておく必要がある。そのひとつの方法が、村に家屋を建設することだ。どんな家でも良いというわけではない。生前の成功に見合った投資を村の土地におこななければならない。そのために、成功者は競うように瀟洒な家屋を母村に建設しているようにも見える。たとえば調査村の一地区で2006年から2010年の間に新築もしくは増築されたコンクリート壁の家屋41棟のうち、都市在住者によって建設されたものは



写真2 都市在住者によって建設された家屋のひとつ

34棟であった。村には、所有者が住まない瀟洒な家屋が増えている。それらの家の持ち主たちは「墓を建てた」と語り、村の老人は「お前が今度調査に来るときは、われわれ老人は死に、村に家と墓が残るだけだな」と、私に語るほどである。

さて、最初に葬式に参列させてもらって以降、多くの葬式にお邪魔し、裏方の作業や親族集団が執り行なう儀礼を観察させてもらった。「故人はどんな人でしたか?」「なぜ埋葬するときに、遺体の頭を山側に置くの?」「だれが都市から遺体を運ぶ費用を集めたの?」など、とにかくなんでも質問し、観察した。村の人たちは「変な日本人だ」と思っていたかもしれないが、おおらかに質問に答えてくれ、埋葬や儀礼の様子を観察させてくれた。多くの葬式に参加し、質問し、写真を取り、儀礼のやり方や道具などの名前をノートに記した。いつしか、なんとなく葬式の手続き、家族や親族の関り方をわかった気になっていた。そんなときに村の「家族」のひとつ、ドナの死に突然直面したのだった。

ドナがこの世を去った病院に私が到着して



写真3 棺を運ぶ兄弟や同僚の小学校教師たち

からしばらくして、夜が明けた。街に暮らす親族も駆けつけ、今後の事が話し合われた。「病院の手続きは?」「遠方の親族、姻族、ご近所や教会へ連絡は?」ホッとする時間もない。「だれが婚約者に伝えるのか?」も話し合われた。彼女はドナの死をまだ知らなかった。病院の手続き、遺体の搬送などを街に暮らす親族に任せ、アロボと村行きのバスに乗り込む。村の家族に訃報を伝え、葬式の準備を始めなければならない。アロボの電話には何度もドナの婚約者から電話がかかってきた。アロボも私もその電話にどのように応えればいいのか思いもつかなかった。村までの1時間半を2人して無言のまま過ごした。

アロボの家に着くと、アロボの奥さんが迎えてくれた。「残念」とつぶやく彼女。いつもの笑顔はない。家には親族の長老2人が待っていた。無言で握手を交わし、長椅子に座った。「ドナが…」といったアロボは涙でそれ以上なにも話せなくなり、老人たちも「泣くな、悲しみが深くなる」と言いながら涙を流した。私も涙が止まらなかった。降り始めた雨が肩にかかったが、だれも気にせず、さめざめと泣いた。

その後、都市から多くの親族が帰省し、酒を飲みながら近況を伝えあい、昔話に花が咲いた。淡々というよりは、どちらかというどタバタと葬式の準備がすすめられた。私が知っている活気ある雰囲気に戻った。そしてドナは多くの親族・近隣者、そして小学校の教え子たちに見守られながら埋葬された。

わかったような気になっていた葬る作業。淡々と、時に明るい雰囲気の中で進められる、



写真4 ドナの葬式のために帰省した親族たち

その作業。その裏に、当然存在する悲しみのことを私は忘れていたのかもしれない。アロボと長老たちの涙に触れ、私自身も「家族」の一員として「死」と向き合ったとき、思い知らされた。いつも明るくふるまう彼らも涙を流し、落ち込み、不安を抱えていた。私はなにもわかっていなかったのかもしれない。

私にとっても大きな喪失感だった。近づいている帰国までの時間を、ドナのお葬式の調査にあてることに決めたものの、ノートをとる気にもなれずにいた。そんな私に声をかけてくれたのは、村の家族のひとりだった。

「ヨシ、お前の友達ドナは行ってしまった。ほら、お前の仕事はノートをとることだろ。ドナのために葬式の写真もたくさんとってくれよ。」村の人に助けられた。私は、ドナの葬式の記録係としていつもより積極的に写真を撮影し、そしてノートをとった。私の調査を応援してくれていたドナを私なりに葬るために。

(本稿は、筆者が所属するNPO法人アフリック・アフリカのホームページに掲載したエッセイを、大幅に加筆、修正したものである。)